



— 連載終了のあいさつに代えて — Feeding は Art だ!

2016年8月に連載を開始して以来、早くも4年半が経過しこれまで53回の連載を重ねてまいりましたが、本連載は今号をもって終了させていただくことになりました。ご愛読いただいた読者の方々と本誌の発行元である日本馬術連盟には心より感謝申し上げます。連載終了のあいさつに代えた最後の駄文にお付き合いください。

・馬の飼養管理で重要なこと

研修会などで基本的な講義をしていると「結局、何をどのくらい与えればいいのか?」と結論だけを急ぐ聴講者は多くいます。その気持ちはよくわかるのですが、馬は個体管理を原則として飼育する動物であり、乳牛や肉牛、鶏、豚など群で効率的に飼育する動物とは異なります。なぜなら、馬は個体ごとにその能力が問われる動物であること、また飼料摂取や運動による反応は個体によって異なり、さらには摂取量の少なくとも半分は占める牧草などの粗飼料には品質のばらつきが大きいからです。では、どうすればいいのか? ですが、各論を重要視しながらメインとなる飼料とベースとなる給与量を取りあえず定め、個体ごとにさじ加減をし、その反応によっては飼料を見直すことにつきます。また、1日の適正な給与量があったとしても、その与え方もさまざまです。さらに言えば、放牧のしかたや放牧地草があればその管理まで千差万別です。これらを効果あるものとするために、日々の馬の体調や変化の観察に加え、それぞれの環境に適した管理方法の工夫が重要となります。まさに、「Feeding is Art (芸術)」であり、Science (科学) だけではなり立たないのです。これは、これまで40年以上にわたって馬の栄養と飼養管理に頭を悩ませてきた筆者自身ももっとも影響を受けたことばです。

・情報の不足をどう補う?

インターネットが普及した昨今、かつてに比べると情報収集はかなり楽になりました。ただし、ほとんどが英語、とくに栄養に関する日本語の情報は依然として少ないままです。これは、そもそも日本語情報の絶対量が少ないことに他なりません。本連載を含め、数少ない情報をさまざまな飼養管理者が閲覧できるよう努めていく必要があります。また、

海外で発信されている情報をわかりやすく解説する新たな情報サイトの立ち上げも有効と考えられます。繰り返しになりますが、こうして得られる情報や知識の多くは一般論や基礎理論であり、それらを目の前の馬にどう応用するか、は馬の状態を見ながら(馬と相談しながら)の調整(さじ加減)や場合によっては個々の情報の取捨選択も必要となります。

・最後に

これまで読者の皆さんから数多くの多岐にわたる質問をいただきました。それらの中から、同様の疑問を持つ方々の参考になればと考え、質問とその回答を今年の7月号(vol.48)から11月号(vol.52)に一部ですが掲載させていただきました。これらのさまざまな環境、目的で飼養されている乗馬やポニー、高齢の引退競走馬を対象とした質問を受け回答を作成する作業は、そうした馬たちの存在と実情を知るうえで貴重な経験となりました。また、古く間違った飼養方法が当たり前のように応用されている現実のなかで悩んでいる方がおられることも知ることができました。ご質問をいただいた方々にはこの場を借りて心よりお礼申し上げます。そして、すべての馬飼養者の皆さんとその愛馬の健康と幸福を祈念して止みません。

ありがとうございました。



図 筆者が研究生活の晩年を過ごした JRA 日高育成牧場で生産した親子馬 強い馬づくりのための研究は、栄養学、運動生理学、草土壌学、行動学など幅広く、このなかで「Feeding is Art」を学んだ。基礎と応用のギャップを埋めるものが、工夫であり Art である。